



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.161  
2017.2.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

53

## 「御嶽山南麓王滝中学校 王滝川上流の遺跡に」 (S62 H2 1987 90)

霊山御嶽山は古代からの御嶽信仰の山で、現在も信者が全国から登拝に訪れる。この南麓の村王滝は江戸時代から一度も合併しない歴史ある村です。木曾川の本川では最大の支流王滝川の最上流に位置し、鉄道も国道も走っていない山の村です。山麓はヒノキ山が広がり97%を占め、戦前は皇室御料林・戦後は国有林で村人が立ち入り出来ない山地でした。木曾ヒノキで有名な木材も営林署の財政確保のために皆伐採され無残な姿になっている。年平均2467mmと降水量は多く、雨を集めた王滝川は水量が多く、江戸時代木曾側の本流は王滝川ではと言われたこともある。昭和18年日本最大の三浦ダムが、戦後滝越ダムが、35年牧尾ダムと村内に建設された。

54年(1979)10月28日早朝の御嶽山噴火は千年の眠りが覚めたと大騒ぎ。幸い小火口の噴煙で終わった。が59年9月14日8時49分王滝村を震源とする直下地震長野県西部地震M6.9は本当にびっくりした。テレビで見た土砂崩れ・土石流はすごかった。

私が王滝中学校に転任となったのは地震からの復興が終わった62年で、復興後の好景気、特にスキーブームで中京からの客が多く、チケット売り場では足元にダンボール箱を置いてお札を足で踏み込んだという時期でした。学校予算も郡下一に豊かで恵まれた教育環境でした。学級副担任ということもあって一番ゆっくり出来た4年間の教師生活でした。スキーシーズンの通勤は交通渋滞で大変でした。

王滝村の遺跡調査は54年御嶽神社里宮参道工事で灰釉陶器が発見され、上松中学校にいた私に村教育委員会から連絡があり現地調査をする。竪穴住居址を確認し発掘調査となった。夏休みの6日間調査し参道北側の斜面に階段状に4軒、縄

文中期中頃1、中期後半2、平安1で、縄文中期の大きな土器の埋甕、平安灰釉陶器碗の『徳寺』の墨書が目された。里宮遺跡調査をキッカケに村内遺跡が目され、牧尾ダムに突出する崩越が遺跡であり、ダム満水時には水没し、またダム水量増減で地形が崩れ変貌しているので早急の全面調査が必要となり、54~56年に国県補助金事業で発掘調査をした。木曾では初めての全面調査で縄文早期集石炉1・前期住居址2・中期住居址6・土壇・埋設土器・平安住居址2を検出した。集落立地・前期土器の関西系土器の比率の多さ・有孔浅鉢の中部と関西の二者・中期後半住居址出土各地域からのセットの土器・平安2軒に多い『一万』墨書土器等が目された。長野県西部地震で田中洞の水田土手が崩れて竪穴住居址が確認され、61年農村基盤整備事業の前に調査となった。住居址のあるA地点と小川を挟んで西の剥片石器製作場をB地点とする。A地点からは縄文前期前半住居址7軒、B地点からは石鏃592、石匙177、石錐128、剥片石器842等と原石である黒曜石・下呂石・チャート・玄武岩の剥片が多量に採取された。土器は神の木・羽島下層・清水の上・北白川下層式があって小林康男・山下勝年・今村啓爾・網谷克彦氏らの指導を、石器は松沢亜生氏に、石器の分類まとめは森山公一氏に依頼した。各地からの交流と交易品としての剥片石器の製造を知った。大岩橋遺跡は排水処理場起工式で出席した一人が神主の御祓いで頭を下げたら足元に土器を発見した。早速私に連絡があり現地調査をする。遺物が散布して、教育委員会に連絡した。平成2年処理場部を、3年には橋付替え部を調査した。縄文中期・後期の多くの遺物を得た。西日本・東海・飛騨の土器があり交流の広さを知った。松原遺跡は牧尾ダム堆砂捨て場で平成9年調査した。平安時代住居址を確認する。少ない遺物の中に緑釉陶器片があった。

王滝村は木曾の僻地と言われていたが、古代は川が交通の主体でしたので王滝川最上流部でも往来は激しく、峠を越えれば飛騨・北陸に繋がっている。御嶽山もあって決して僻地ではなく地域の中心地であった。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



▲崩越遺跡



▲大岩橋遺跡調査

## 目次

■田舎考古学人回想誌 御嶽山南麓王滝中学校 王滝川上流の遺跡に 神村 透 …1  
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第16回) 岡田淳子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第154回) 浦志真孝 …3  
■考古学者の書棚 「系統樹曼荼羅-チェイン・ツリー・ネットワーク」 西井幸雄 …4

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第16回) 岡田 淳子

## ⑩北海道最初の仕事は利尻島

1974年、夫は北海道大学に新設された北方文化研究施設の文化人類学部門から声がかかり、あっさり北海道へ居を移してしまっただ。北方研究に生涯を掛けたいと考えてのことであろう。その年の3月に一緒に北海道へ行って見ると、残り雪もまだ深く、木々は枯れ木のように色が無く、その厳しさに夫の暮らしの準備を済ませると、子どもたちを連れて東京へと戻った。

私が北海道へ正式に移住したのは、翌1975年からである。子どもの為にも家族は一緒に暮らすのが良いとの考えからであった。研究職に就いていないと科学研究費受給の対象にならないので、私は札幌から東京の大学へ飛行機で通勤する道を選んだ。

翌年の夏休みに北海道教育委員会の藤本英夫さんからお話があって、「利尻島の埋蔵文化財分布調査」を行うことになった。私は何人かの後輩に手伝って貰い、夏休みに利尻町、東利尻町(現利尻富士町)での調査を始めた。利尻町では国学院大学4年に在学中の西谷栄治さんが手伝い、地元の力を充分に発揮してくれた。西谷さんだけでなく、町の教育長はじめ教育委員会の職員の皆さんも、全力でこの仕事を支えてくれた。旅館で会った人から「何しに来たの?」と問われ、「遺跡の調査で…」と答えたら「あ、井関(農機具会社)ね。」と言われる。そんな意識の時代だった。

火山島なので山の高い部分に遺跡は無かろうと、島を巡る道路の両側を中心に表面採集を始め、更に地形図上で流れや湖沼など水のあるところを特に詳しく調べて歩いた。地図では解らないようなところでも、西谷さんから伏流水の出口を聞いて対処することができた。西谷さんは幼い頃からの生活実態を話してくれて、そのことが、どれだけ調査に役立ったか分からない。

連日お会いするうちに町の職員さんたちともすっかり打ち解け、週末にはバーベキューに招待していただいたこともあった。石板焼きをするのだが、「山鍋にしますか?浜鍋にしますか?」と尋ねられ、私は、島の特産は海産物だからと浜鍋をお願いした。連日下を向いての作業の中で、その美味しかったこと、それから40年になる今でも忘れられない。

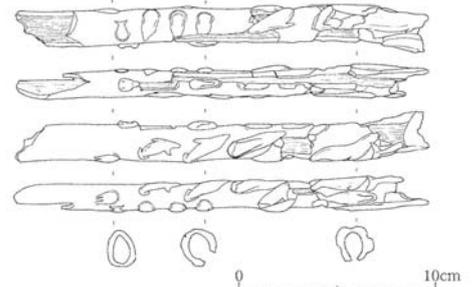
後半は東利尻町。利尻町とは対照的に長く教師をして後、社会教育に移られたベテランの古河恭司先生が町教委の担当で、先生のご自宅を宿舎にしての調査、お子様3人のご家族とも親しくさせていただいた。小型トラックを借り上げ、鷺泊から本泊、野塚、姫沼、鬼脇、オタドリまで東半分を歩き、西半分より遺跡はかなり多いことを知った。ことに鷺泊北の苗圃で旧石器を発見したり、孤立したペシ岬灯台の近くで、スヌヤ式、オホーツク式の大形土器片をたくさん発見したりした。

8月半ばに「明日からお盆ですが休みますか?」と問われ、私は札幌へ帰ってまた出かけるなど考えられなかったので「休みません」と答え、ご迷惑をかけてしまったらしい。お盆休みは全員休むので、仕事をすることはできないという。古河先生は調査員たちを礼文島の北端、床丹のご親戚へ連れて行ってくださった。ちょうど進水したばかりの船に乗せて貰って一回りとの

ことだったが、残念ながら私は「海の女神」の妬みを恐れて乗ることができなかった。

夏休みの間にすべてを終えて札幌へ戻り、整理の場所も無くどうしようかと思案していたところ、それを聞いた札幌市職員の加藤邦雄さんが、ちょうど手の空いたアルバイトの女性と場所を使うようにと手配してくださった。何という幸せであろうか、中田遺跡で知り合った北海道の人たちへの感謝は尽きない。その際発見した二十数か所の遺跡数は、その後40年たっても加えられていないと聞き、私は協力してくださった関係者の皆様に感謝しつつ満足している。

野塚付近に縄文中期の円筒式土器を出す遺跡があった。それが函館サイベ沢遺跡の土器とよく似ており、北海道の北筒ではなかった。当時円筒式土器の研究をしていた高橋正勝さんも認めている。このことは、文化が北海道本島から最短距離の海を渡ったのではなく、渡島半島付近から渡ったことを示していた。利尻島の漁師さんたちは、春になると南風が吹き、海流も南から北へ流れて、じっとしていても島へ辿り着く。反対に冬には北から南へ流されるとのことで、近代以前の文化の流れに示唆が与えられた。調査の結果については西谷さんご厚意により、「利尻島の文化財(1)、(2)」として、概要を利尻町立博物館年報3及び4に載せてある。



▲「亦稚貝塚出土のトナカイの枝角 数種 海獣が彫られている」1977年

利尻島とのご縁はこれだけでは終わらなかった。翌1976年まだ寒さがおさまらないうちに、利尻町教育委員会から沓形地区の亦稚貝塚が工事で壊されるので、調査するという。道教委とも相談のうえなので調査をして欲しいとのことであった。私はまたも後輩たちを頼み、調査の準備を整える。有名な貝塚を調査できる喜びもあったが、ひとり宗谷本線に乗って雪の夜の寂しさを感じることもあった。発掘はトナカイ角の彫刻品など、道文化財に指定された遺物も発見され、再発掘のサルベージ事業としては思わぬ成果を得て「亦稚貝塚」(利尻町教育委員会)という黄色の素敵な報告書も出来上がった。当時の社会教育の保野係長は、いま「利尻町長」として利尻島のために尽力している。

## 略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁葎子先生です。

## Uレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 154

#### 井戸川遺跡 ～静岡県伊東市～

浦志 真孝

私が伊豆半島の東海岸にある温泉まち・伊東で仕事をするようになって二十数年になります。市内には、国指定史跡・江戸城石丁場遺跡をはじめ、旧石器時代から昭和時代まで様々な遺跡が残っています。初めて掘った弥生時代の集落跡、街なかの古墳群、昭和の防空壕跡など。それぞれに思い出があります。その一つに、考古学ばかりでなく、美術など様々なものに興味を持つきっかけを作ってくれた遺跡があります。それが、これから紹介する井戸川遺跡です。

遺跡は、伊東市の東に広がる相模灘に面した伊東の海岸からおおよそ300m内陸部に入った、海拔4～10m前後の沖積地上にあります。今でこそ、海岸から離れていますが、昔は遺跡近くまで海が広がっていたものと思います。過去の調査から、この遺跡は、縄文時代にはじまり、弥生時代、古墳時代、奈良、平安時代、鎌倉時代、戦国時代、現代と長い間、人々の生活が繰り返し営まれてきた場所であることがわかってきました。



▲白磁碗と渥美窯の甕

平成22年3月から4月にかけて、住宅工事に伴って、第四次調査を行うことになりました。おおよそ1mの表土を機械で掘削し、中世の遺物包含層から手作業で掘り進めました。最初の戦国時代の地層からは、10cm～20cmほどの礫と陶器や土器、動物の骨が広がる場所が見つかりました。竹ベラを使って土を除いてみるとイルカの脊椎骨などでした。当時の人々がイルカを解体した後、土器と一緒に廃棄した場所ではないかと考えています。さらに下へ掘り進めると、今度は、鎌倉時代の地層で、陶磁器などが次々と見つかりました。実は、ここからが、この遺跡の大変さの始まりでした。他にも、20～40cmほどの礫が帯状に延びる場所が見つかりました。その礫の陸側では、白磁や常滑・渥美窯の破片が今までのものに比べ、破片も大きく、溜まっている状態でした。移植ゴテで掘るたびに遺物が見つかるという光景は、今まで、中世の遺跡で経験したことのないものでした。

調査期限が迫る中、郷土の歴史の1ページを加える貴重な資料であることを市民に知らせなければいけないと思い、報道発表することにしました。調査の後半は、雨と湧き出す水との戦いでした。終わってみれば、中世の遺跡の包含層の深さが1.8m、遺物は、おおよそ100㎡という調査面積に対し、10キロ入りみかん箱30箱分の量でした。



▲当時の新聞記事(伊豆新聞 平成22年4月15日掲載)

現在、伊東市文化財管理センターでは、平安時代末から鎌倉時代初頭の館跡や港湾遺跡の資料を調査しながら、報告書刊行に向けて整理作業を進めています。

その中で、白磁などの貿易陶磁器、常滑・渥美窯の甕や壺、山茶碗、伊勢型鍋、瓦器椀、東播磨系須恵器鉢、滑石製鍋の国産陶磁器類など各地の様々な遺物があることがわかってきました。天然の良好な港湾に面し、海を介してモノが流入しやすい好適な環境にあり、海上交通等で集まった物資の流通の一拠点としての役割を果たしていたのがこの遺跡なのではないか。そして、そこに関わっていたのが、当時の在地領主・伊東氏かもしれないと…。

資料の一部は、文化財管理センターで展示しています。伊豆にお越しの際は、是非、お立ち寄りください。温泉と海の幸でお待ちしております。



▲伊東市文化財管理センターの展示

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは増山順一郎さんです。

## 考古学者の書棚

## 「系統樹曼荼羅 – チェイン・ツリー・ネットワーク」

三中信宏(文)、杉山久仁彦(図版) / NTT出版(2012)

西井 幸雄

今回紹介する本は、2010年から2012年にかけてNTT出版のウェブサイト上に連載した「系統樹ウェブ曼荼羅」を基に上梓された。本文は三中信宏氏、図版を杉山久仁彦氏が担当している。

三中信宏氏の本はこれまでに講談社現代新書の「系統樹思考の世界」と「分類思考の世界」を読んでいた。氏の専門は生物学（農業環境技術研究）だが、幅広い視点から分類学を論じており、考古学の立場からも参考になるのではないかと思う。この様に書くことはいいが、三中氏の本を手取るきっかけは、同僚と読んでいた漫画「もやしもん」である。同僚が関連する？（「分類思考の世界」のなかで「もやしもん」が使われている）面白い本があるよと教えてくれた。それ以後、興味を持っていた。たまたま、パソコンの検索サイトに三中信宏と入力したところ、NTT出版のウェブサイト上で「系統樹ウェブ曼荼羅」が見つかり何回は閲覧した。系統樹関連の綺麗な図版が掲載されていたことを覚えている。本屋で綺麗な表紙の本があったので、手に取ってみると三中信宏著となっていたので思わず買ってしまった。

本の構成は下記の通りである

プロローグ 世界を覆いつくす系統樹：そのツールを探る

第Ⅰ部 「生物樹」：多様な生物界の図像化

第Ⅱ部 「家系樹」：人間に直結する家系図

第Ⅲ部 「万物樹」：森羅万象は系譜となる

エピローグ 曼荼羅鳥瞰：系統樹を生み出す人間という存在  
系統樹リテラシーのために

最後の「系統樹リテラシーのために」は杉山久仁彦氏が文章も書いている。

本書は、対象物を分類・整理することは、人間にとって根源的な認知行為であるとする認識から始めている。

プロローグでは、生物分類学は18世紀のリンネをもって科学としてスタートした、それ以前の分類学を「民族分類学」と呼ばれている。人は対象物の多様化を体系的に理解する記憶容量はなく、色々な手段（チェイン・ツリー・ネットワーク）を用いるのだと述べている。

第Ⅰ部「生物樹」では、生物学で系統樹を見ると進化論を

イメージするが、ダーウィンの「種の起源」にはシンプルな「ダイアグラム」が1枚入っているだけである。しかし、進化論の理解にそのダイアグラムははたした役割は大きい。美しい系統樹を多く描いたのは、同時代のエルンスト・ヘッケルである。氏は画才があり、今日のグラフィックデザイナーにも影響を与えている。しかし、系統樹は進化論から始まるわけではなく、それ以前から、人間の思考形態を図像化する手段として用いられてきており、進化論を理解しやすくするための手段として使われたことが分かる。

第Ⅱ部「家系樹」では、科学以前の旧約聖書の中で、父から子と連綿と名前が綴られているが、まさにそれが家系図である。他にも神話の中で名前が連綿と綴られている場合がある。考えてみれば、稲荷山古墳の辛亥銘鉄剣も何代かにわたって人名が列記されている。人は言葉を使えるようになると、自分のアイデンティティを求めて、家族（集団）の中に自分を位置付ける。連綿と綴られた名前を記憶するため、図像を作るのかもしれない。家系樹の書き方はヨーロッパでは直系編重「直線系譜」であるのに対し、新大陸のマヤ・アステカでは分岐的「人間の網」で表現されている。地域によって多様なことが分かる。

第Ⅲ部「万物樹」では「人間が自らの「知識」をどのように体系化してきたか」を古くは18世紀の百科全書や写本の系統から、現在のマンガ作家の系統樹、キャラクター（ポケモン）の系統樹、企業の変遷図まで取り上げている。人は知識を整理し体系化するのに図像が有効であり、逆に何でも整理しなければ気のすまないのが人間かもしれない。考古学もまた、遺跡・遺構・遺物を体系的に整理しており、それを視覚的にどの様に表現できるかを考えることが多い。専門外の論文で内容はわからなかったが、岡安光彦氏が1984年の論文で素環の嚮変遷を系統樹に概念化した図掲載している。それを見たときに綺麗だなと感心したことを思い出す。

分類学に関する本は、生物学を専門とする人が多く、人工物に関しては懐疑的な意見が見受けられるため、物足りなさを感じることもある。三中氏が取り上げる素材は、まさに森羅万象で興味深い。本書は考古学に直接関わるのもではないが、人が対象物をいかに整理・分類してきたかを考えることは、考古学といかに向き合っていくかでもあり、こうした本を読むことによって、刺激を受けるのも楽しいことである。

アルカ通信 No.161

発行日 2017年2月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp